

平成二十八年年度

小金井平和の日記念行事

「戦争体験談集」

小金井市

はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を三年ごとに行っています。昭和二十八年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年十二月二十日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和三十五年十月三日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和五十七年四月一日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の精神からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和五十四年三月二十日に制定された「小金井市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和首長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成二十六年十二月十八日には、戦後七十年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づき実施する平和の日記念行事における戦争体験談発表者の体験談と短歌を冊子にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にいただければ幸いです。

平成二十九年三月五日

企画財政部広報秘書課

目次

「十四歳の特攻兵」

村瀬 杜詩夫（八十歳代 男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

「恐怖の日々を生きのびて」

永井 孝子（八十歳代 女性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

「十四歳の特攻兵」

村瀬 杜詩夫（八十歳代 男性）

● アプローチ（序論）

本日の私の演題は「十四歳の特攻兵」です。年配の方はお判りでしょうが、若い方にはわからないかもしれません。第二次世界大戦が終わって七十一年になります。七十歳の方はまだ生まれていませんし、八十歳の方も小学一年生ぐらいでしたから判らなくて当然です。特攻兵というのは特別攻撃隊員ということで、飛行機や小型潜水艦に爆弾を積んで敵艦に体当たりする攻撃法で、もちろん操縦している人は必ず死にます。目的は違いますが、現代世界を恐怖に陥れている自爆テロと、方法においては酷似しています。

● 学徒動員令

太平洋戦争（第二次世界大戦）のはじめは日本軍は真珠湾奇襲、マレー半島上陸などと優勢でしたが半年程経つと連合軍の総反撃が始まりました。当時私は小学五年生でしたが、今でもはつきり覚えていることがあります。それは連合艦隊司令長官・山本五十六元帥の搭乗機がソロモン群島のブーゲンビル島上空で撃墜されたことです。日本海軍の英雄の戦死は子供心にも不吉な影を落しました。

こうした戦局に呼応するように学徒動員令が公布されました。これは大学生や中学生を軍需工場や兵士として動員するという法令です。

このとき私は旧制中学一年に進学していましたが正規の授業は少なく、退役軍人の配属将校による軍事訓練が中心でした。入学から三ヶ月後に私たちは学徒動員令により、当時東洋一の規模と言われた豊川海軍工廠へ動員されました。私の配属先は光学部で、作業は軍艦に装着する測距儀の最終点検で、北海道大学の学生と一緒でした。

● 通信訓練を拝命

ところが、配属して一週間ほど経った朝、突然母校の校長室へ呼ばれました。校長室には長剣を吊るした配属将校が陪席しており、只ならぬ雰囲気でした。校長は重々しい口調で、「先月末、軍令部より愛知県下の中学から通信指導者の養成訓練に代表一名を派遣するようにとの通達があった。実は清水中尉ともご相談して君を推薦しておいたら、昨日正式決定があった。おめでとう」

● 父母の反応

家に帰った私は、父と母に通信訓練生に選ばれた経緯を報告しました。

父は「学校の代表で海員養成所へ行くのか。海軍工廠に動員されるより良いじゃないか。海兵（海軍兵学校）の受験に有利になるかも知れんぞ」と言った。だが、母は黙っていた。

当時、貧しい家の子弟は志があっても月謝の要る上の学校へは行けないので、陸幼（陸軍幼年学校）や陸士（陸軍士官学校）、海兵へ進む人が多かった。

我が家では次兄の武が陸幼から陸士へ進み、現在は関東軍騎兵隊の中隊長を務めていました。しかし長兄弘は、お話をのをためらうような悲しい道を歩いてしまいました。弘兄は兄弟の中でもズバ抜けた秀才で、家庭教師のアルバイトをしながら浜松中学を卒業し、海兵を目指していました。その頃、海兵へ入るのは東大より難しいと言われていましたが、学校をはじめ誰もが兄の合格に太鼓判をおしていました。……しかし、兄は合格しませんでした。学科はダントツでしたが、体格検査でひっかかったのです。兄はアルバイトの無理がたたって肺結核にかかっていたのです。

家に帰った弘兄は、一か月後、睡眠薬の誤飲で亡くなりました。しかし、後になって母が私だけに見せてくれた紙片には、兄の文字で「母さん、ごめんなさい。あの世で孝行するからね」と書いてありました。兄は自殺したのです。

● 高浜海員養成所へ

申し遅れましたが、校長から代表決定の話をされた際に、赤い紙の出頭命令を受け取っていました。当時は、一般兵士の召集令状は赤い紙に印刷してあったので「アカガミ」と呼ばれていました。それを見た母は、「なんだか戦争に行くみたい

だネ」と悲しい表情を見せていました。父は、「それを見せれば電車賃はタダだ。良かったじゃないか」……と。

高浜海員養成所は、愛知県知多湾の衣ヶ浦に面していました。生徒は殆んど戦線に出ているらしく、所内には我々と同年輩の子供と教官だけでした。

宿舎は木造の細長い部屋で、一室が十名。夜は、柱にハンモックを釣って眠りました。「おい、まるで軍艦の中みたいじゃないか」はしゃいで騒いだのも一日だけ、翌日からは激しい訓練が待っていました。まず、最初が次のような五省の暗記です。

五省^{せい}

- 一、至誠^{もと}に悖^{もと}るなかりしか
- 二、言行に恥^はずるなかりしか
- 三、氣力に欠^かくるなかりしか
- 四、努力^{うら}に憾^{うら}みなかりしか
- 五、無精^むに亘^{わた}るなかりしか

私は海兵受験を目指していた兄の部屋にあったものを毎日見ていたので、覚えました。(実物を見せる)
そのせいか、私は班長に選ばれました。

通信訓練は、モールス信号、手旗信号、手まね信号(ジェスチャー)の三つでした。モールスと手旗は中学の教練でも習っていましたが、実戦用の信号は全く違っていました。

特にモールスは最初からやり直しです。中学ではイの・―は伊東^{いとう}、ロの・―は路上歩行^{ろじょうほこう}、ハの―・―はハーモニカのように言葉に直して覚えていましたが、実戦では却ってこれが邪魔になり。「それを忘れろ! ツートンの音を聞いて直ぐに言葉が浮かぶようにするんだ!!」……できなかつたり遅れたりすると海軍精神注入棒がお尻にとんできます。これは太い

櫛かの木で作ってあり、後で聞いたのですが、太いほうけがが怪我をしないんだそうです。

手旗信号は片仮名を手の形で表した信号で、このようにやります。(イロハを実演する)

手まね信号は砲煙弾雨の中ではどなっても聞こえないので、ジェスチャーで知らせるのです(上甲板火災じょうかんばんかさい、消火器もつてこいを実演)

● ある日、突然！

全員が必死で取り組んだおかげで、通信訓練は二ヶ月で終わりました。

そんなある日、皆が講堂に集められました。「おい、いよいよ卒業だぞ」「やつと豊川へ帰れるかな」皆がガヤガヤ騒いでいると壇上に海軍の制服を着た所長が現れました。

「諸君、おめでとう。これから大切な知らせをする。諸君は本日をもって通信訓練の課程を無事終了した。本日から、…通信訓練生から特別攻撃隊員に昇格する。細かいことは、特攻隊長から説明する。

代わって登壇した隊長は現役の軍人らしく、制服に大尉だいいの肩章けんしょうをつけていた。(海軍では大尉をダイイと読む)

「諸君、おめでとう。細かいことは訓練のとき話すが、今日は重要なことを一つだけ話す。しっかり聞いて必ず守るよう…。この特攻隊作戦は、軍事上の重大な機密だ。従って、この件に関しては先生方や友人は勿論、親、兄弟といえども絶対に口外してはいけない。これだけは、絶対に守ってくれ。」

隊長の真剣な表情と話しぶりで、ザワついていた講堂が忽ちシーンと静まり返りました。

● 軍国少年

特攻隊員がどんな役目かは、私も判っていません。しかし私は、死ぬということこわを少しも怖いとは思いませんでした。小学生的頃こから、軍国少年として育てられたからです。その教育法はいろいろありますが…例えば小学生の頃は「戦死すれば

靖国神社の櫻に生まれかわれる」と言われましたし、中学時代は「戦死すれば神様になれる。そして靖国神社に祀られ、かしくも天皇陛下がお参りしてくださる」など。また養成所に入ってから「人間は百万長者でも貴族でも、必ず死ぬんだ。どうせ死ぬなら野タレ死するより、戦死して神様になるほうがいいぞ」とか「赤穂四十七士は敵の吉良上野介を討つて主君の恨みを晴らしたが全員が切腹をさせられた。その代わり忠臣の鑑かがみとして三百年以上の後の現代まで、物語や芝居で褒め称えられている」など言わば死の美学を散々教え込まれてきました。だから、その時代の私は戦死が怖いどころか、誇らしく思う軍國少年になっていたのです。

● 特攻訓練の実態

☆まず最初は索敵さくしよ（敵を探す）訓練

例えば敵の潜水艦を見つける訓練では、大きな板上に潜望鏡に見立てた黒い棒を薄暮はくぼの海に流し、それを岸から凝視して「敵潜水艦発見！東南方百メートル！」などと叫ぶ。その距離が間違っていると、「バカ！三十メートル違っているぞ、体当りしても無駄だ!!」とどやされる。こんな訓練を必死に続けているうちに、ほとんど全員が遠視になってしまった。

● 上陸用舟艇への体当り

当時の米軍が敵前上陸で使った舟は四十人乗り程度だった。それに爆弾を積んだ小舟で体当りする。大人が乗ると沈んでしまうようなエンジン付きの小舟に舳先へびさきに二十キロ程度の爆弾を積んで突進する。敵船に近づいて自分が撃たれたら失敗するので、近づいたら舵かじを固定し、自分が死んでも敵船が爆発するように訓練された。

☆ 敵戦車をタコ壺つぼで待つ

戦車には通常二つの銃が装備されているが、その威力は遠方の目標には大砲のような威力を発揮する。しかし砲身を低く

下げられないので近い目標は射撃できない。対戦車攻撃では、この弱点を狙って近距離まで引き付けてから攻撃する。海岸に人が隠られる程の穴（我々はタコ壺と呼んでいた）を掘り、その中に枯草で偽装をした鉄兜をかぶって潜む。

そして、相手が砲を下げさせられない死角に近づいたのを見届け、穴から飛び出してキヤタピラー（戦車の車輪に巻いた鉄の回転ベルトの下に飛び込む。このタイミングが、なかなか難しい。爆弾を胸に抱いて俯きに飛び込むと自分の体が邪魔をして爆発力が弱まる。だから、飛び込む瞬間に体をクルリとひるがえして、爆弾が体の上にくるようにする。これが完全に出るまで何回も練習するのだが、その度に自分の体の上で炸裂する爆弾のイメージが浮かび、さすがに余り気分の良い訓練ではなかったです。

● 少年特攻隊は、なぜ生まれたか？

軍の上層部は、米軍が途方もない作戦を考えているらしいとは薄々感じていたようだが、原子爆弾の開発に成功していたとは思いつかなかったようです。当時の上層部がいちばん警戒していたのは、東京に上陸され、皇居が攻撃され、最悪の場合には占領でもされたら…と思っていたのではないのでしょうか。その場合は、真珠湾の苦い経験から、東京湾内には直接入らず、京浜海岸と千葉県九十九里浜に上陸して、両方から東京を挟み撃ちするのではと考えていたようです。ところが精鋭部隊は前線に出払っていたり玉砕してしまつて、東京を守る戦力が無かつた。そこで、一か八かの戦術として、上陸する舟艇と戦車に子供を使った玉砕戦法を考えましたようです。

● 私が敢て恥しい話をした理由

実は、今まで話したことは、私が初めて口にしたものです。私は結果的に騙されて少年特攻隊にされたのですが、当時の私には全く騙されたという気持ちはありませんでした。

それどころか、前にもお話したように、特攻隊に選ばれたことを誇りに思い、死ぬことに喜びさえ感じる軍國少年だった

のです。だから、そんな自分が恥ずかしくて、一言も口にしなかったのです。この私を変えた二人の人がいます。一人は鶴見俊輔先生、もう一人は友人の川澄哲夫君です。

お二人については、時間がなかったので省略しますが、私は本日の話をドキュメンタリーとして執筆中ですので、そこでは詳しく紹介させていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

「恐怖の日々を生きのびて」

永井 孝子（八十歳代 女性）

こおろぎ
蟬の

なね
啼く音がいやす

こお
壕の中

昭和十九年

や
学び舎は

いくさばた
かりそめの名か戦傍

あす
明日をも知れぬ

友と伏せ居り

昭和二十年五月

あくる日も

来る日も敵機おそい来て

一人二人と

友は逝きけり

昭和二十年七月

かなしみを

分ち合おうすべ今はなく

慰め言も 泪交うのみ

昭和二十年

空襲で家族を亡くした友へ

おさげ髪

(唯一途)

頭巾につみひたすらに

戦勝祈り壕に

明け暮る

昭和二十年三月

東京大空襲の後に詠む

この地こそ 敵機は来ぬと思ひしに
命からがら逃げまどう 日々

昭和二十年三月（小六）

敗戦と知りつ 平和のめぐり来て
安らげき日々 夢かうつつや

戦後間もなく（高女二）

けんか風

からみて切れて落つること

人のきずなの

哀れにも似て

昭和三十年

戦争とかけて詠む

零戦^{ゼロ}に

命託して 果つる日を

夢にえがきて

いくさ終りぬ

夫の心境を想う

昭和六十年

地下壕かごうに

友と肩寄せ過ぎし日々
今なつかしく

文をひもとく
ふみ

平成三年

小学生の頃から書きためた詩、短歌、日記に思い出が甦える

忘れし

戦火あしの跡に咲きし花

哀かなしき思い

知らぬ如くに

現在は小金井公園として何事もなかったように・・・

乱れゆく

世相の移り感じつつ

変りなき日の

忙しさに暮る

何気なく

聞き居りしロシヤ民謡も

陰に悲しむ遺族ありしと

高校在学中にて

亡き戦友を^{とも}

しのぶ集いの

筑波路は

居並ぶがごと

彼岸花紅し^{あか}

夫の戦友慰霊祭に参加して

若鷺の^{わし}

命燃やせし丹波市^{たんばいち}

思い出草は

今も茂りて

戦時中夫が入隊していた兵舎は現在も天理市に在り面影をとどめている

戦争体験談集

発行 平成29年3月5日
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
小金井市本町六丁目6番3号
☎042-387-9818